



女式目鏡

萬家日用
婦女必讀

全



門 0428
號 1551
卷

我與兄在洛陽中書一略以之
蘇子瞻家書也四云以書家
心一我與兄在洛陽中書一
我與兄在洛陽中書一
我與兄在洛陽中書一
我與兄在洛陽中書一
我與兄在洛陽中書一
我與兄在洛陽中書一
我與兄在洛陽中書一
我與兄在洛陽中書一
我與兄在洛陽中書一

御製

自序

附

女四書いれりふの如婦女子は
教ふべき種に書に女今川
女孝經女小學女大學女古
儀女武目以て見えは男子
儀も所成敗武目を公事所
決断の大法神事始めり罰文

終我國神國なればかきとるなり
女の用ひの遠りの由を其名を
かき女生涯の心得を記し始終
神事めよとて婦女子の教訓
を

東武南郭居士

高井蘭山述

天保壬辰夏





小督局ハ言ハテ院小つて婆世にすれ筆の上きん
 ぬすちやうて悲悲ふく落おそのわうつひか
 いひちの好てあやききり候るうあひだをむ
 うじうあ人のいりふんうあうんをきた
 うあひはしと君きこーわかれいふくはえ
 候うさじりういふはの能勝の女者
 小あうあやとうい他人をりてま下つ
 うこのその小あやまうりたををに
 ちうすいひちうあうくわうあうその
 こらうさう有かうたのいんうううう
 ううこりや

英琳琴琳



女式目

高井蘭山撰

かゝるそ我國小生う人
 せせ上れ男女あて
 諸神の子孫なりを
 方分の系譜も正し
 代々相續し来り



本朝女
廿四季

吉備兄媛



すもも傳れども卑き
力かゝ家も傳る書物も
形もびの武百年も収
おの何玉何人なりしや知
まぬ者多しこれども乞食
氷人ぬまふ海づいしうし

備前國何某の女
やういふ 應神天皇
小宮はく遠く皇女
とされききききき
孝女で常に父母を
一日天皇親政所
あるくきききき
やういふはききき
兄媛傳ふけりて秋の
もりの天皇の中
て同せぬいしきき
妻平生に父母の
日されけり今病の
方を病むいしき
く存するわづら
國ふいしきき

神乃所裔あるぬらねき
なれど自他神を敬ひそふ
事ありか痛ありこれ
何神の子孫あるや知ま
ばも元神らびうし
人の足ある大城ある人の

芥 カイ 摘 テキ 妃 ヒ
 妃 ヒ の 大 ダイ 和 ワ 國 コク 飛 ヒ 香 カウ の 所 ショ
 辺 ヘ を 入 イ り 行 ユク く 後 ノチ 孝 コウ の
 母 ハハ を 入 イ り 父 チチ を 入 イ り
 母 ハハ 父 チチ は 一 イツ つ 日 ニチ も
 孝 コウ を 侍 サマヘ せ 二 ニ 日
 母 ハハ の 好 ス む 入 イ り 入 イ り 孝 コウ に

知て并て橋とその日
 聖を種を子種橋宮
 一羽を子種を母
 の老がもは種とて母
 らんとたの例又のい
 相伏と種れも母
 へん向もやとて母
 とて母を種れ
 子種車れうち
 是これに種れ
 あやとて母
 侍居とて母
 とて母を種れ
 とて母を種れ
 侍居とて母
 とて母を種れ

又も國々大功あるの仁
慈乃深き善人も
神といふ祀られもの
を不敬とすき事にあらず
第一位勢ある宮八幡宮を
肇なり日光乃御宮

それ方の生土神成宗
 尊ぶべし但し祀る處も
 知れざる神を信ずる
 る惑ひあり
 一面の善提下へ親先
 祖乃墓に在る不偽娘の

孝を教へしむるに
 傳ふことあるに言ふ
 雖も食ふべし然るに
 の女よりと傳へる感
 はなれど此の心は
 小の家の主より母



其の檀方れ施物こそ
 立所の衣盆暮室
 例乃納めしやに及ぶ
 臨時の勤化善法乃
 寄進ふ分限相應の事ハ
 納て延引進席するも

その事成すまで
 まして孝女を後世に
 のせ宮中れなり
 遂に妃に冊さるる
 人并攝の妃と稱
 其賢智孝貞世
 上たわられる彼漢
 女齊の宿瘤女なる

蘇我造媛

蘇我の石川麻呂の
 娘の中女皇子の
 女に姓を別との名
 漢にやける小園で皇
 子河慈法とて石川
 蘇我二田の姓といふ

先祖一對に緩急に當り
 人間の及ぶ宵なり我ち
 此事ハ一切疎畧を存べ
 かたは但し縁も無く
 唯佛といふを考くとも
 ちこれ信んぬ思慮の

のふけせぬの造後ふ
かく敷きおれり
後といふ名をすくも
忌避しけり
ののすくも後の名
を改めん
くられも後ふけ



たて食事に仕え
く修めり
これに後ふけ
いふふけ
波自來女
のふけ
まお早くおれり
客いふか
ふ若あき
いふか
まお早くおれり
父母あき
そは養のやうに

迷ひ女の厳しく制禁

と云

一若れた女の名をよめる

ふふ家事を帰る

基あり

ふふあ親の傍ふあり

事の間とつるも成長

それとあるひに儀をも

見習せん名をふ出

又他の妻とあつても

男姑とせしは父母

同るに生涯孝養成

庵をひまひたす女をたて
 侍とせしむる時、天
 子稱徳天皇は孝を
 賞め、は感たてけし
 首領のしその名をせ
 にしめたるなり



決つたりのありあうと
 何ぞと孝を勉め
 事なりと乃に成
 思ひ親のなえよるる
 以のあうめも人を受し

難波部安良賣

父母の孝をそひ母
 お早く別れそあう
 秋の紅葉をみよ
 悲しき心ひり十六
 歳ふく同いふ像
 秋の紅葉をみよ
 あつたふあう
 又秋の紅葉をみよ
 悲しき心ひり十六
 歳ふく同いふ像
 秋の紅葉をみよ
 あつたふあう
 又秋の紅葉をみよ
 悲しき心ひり十六
 歳ふく同いふ像

孝行を勵むとこの勉
 方々女孝行をいふ
 けまごよみと知
 男の孝行は身體
 膚を父母より受て
 毀傷らば孝乃始め

住二級を編で首を
るさせたまひた
とぞ



櫛氏妙仲尼

橋邊勢女之父
衆於伊豆園配流
せらるゝあき
ども父の別をわ
けられしをい
けられしをい
目の中をう
あきつゝん
けをい
遠江をい
あきつゝん
これぞ

さう
名残後世
終り
父母金く
おれ
世程小
死

世
毎
の
目
愛
何

名を姉仲と改め暮ら
す所を遠く異國を
悲歎とこれはいふ



力を殺してもみえ事
臨機應変といふの
ふりあり深文は強盗白
刃を握り押入姑の危を
救ふとて底を藁にま
せられと不孝といふん

二十年あつた
はる天福二年に
わが有る遠方
信を頼む館を
祿とれすつりける

忌寸果安妻

大和の依紀の民
氏の娘とて同郡
果安といふ者の
あれうも妻と
てうりたりと
舅姑は孝行
又徳子といふ
人ありとて

我が父母乃こそ
悦我あやまとい
形とぬと迹隠
はぬと死せむ
乃成ちる山
ぬらぬと此
ぬらぬと此

かくも一そこれを
 世に理を以て
 孝の及ぶ慈の及ぶ
 慈の及ぶ慈の及ぶ
 賢女の心こそ
 儼然たる感あり



遠く理を辨く分別
 定くは應答とのま
 のち早速に智慮の働
 ぶ名その時と案と考る
 やうにくへるふ合はる
 思慮を廻し物の理を

越後松山孝女
 越後の松山孝女
 女ハ初メ父母を孝
 勤むることを中母
 孝に病み伏する



明のめを分るすいつぐ
 のち速にわりの娘か
 親ひむく人乃善言
 善行をあらはる書
 まのそ多く入るに
 学問とん坊へ著書集

薩摩福依賣

薩摩國のその村
ある族に其氏乃
胎之父母老て病
あり将に死す
さうをて福にあり
あつて人々を
物をて父母を
をて中より其
求めてこれ後
金銀を以ての
身給といふも
中よりとす
年及ぶや乃
ありを仁善の者



小桑園にあれば其の
あり位に及ぶ
門の孝女の事
さうをて

ふー叔父の軽き武家
農高の家不勤る方
主従とありて身分
主人と侮るべし
年月拂り形なき
縁を以てあつて永く

夫もあつて人々
或る勤方何く不
暇を以てあるい
争論を起しね
下宿し主人の不
欠であるい不義
男を徳ひ

松風村雨

二人の憎みの隙の時
國といふ人の女初は
て父母孝あり後母
みまうられぬ時
妻を遣ふに
母はかたしきもの
二人の隙の目
いふ所のいふ
及ぶあつた
憎む娘を
をぬく
父ふね二人の
せんははの
くひ
てはえられも

ともいふ
あつた
あはれ
いふ
せん
さう
の
老
抱
さ
ふ
と
二
退

不束の働で何となく早免

主を救くえるを起り

は中ねふじが親語人

世話を懸るこれ又不孝の

一条あり

一首曲に何藝ふううに

稽古なる師匠男あうち

老若あう育人あうに親く

奥向まう入教入焼を

塾ト人修好するりたせ

不束れ術に堪能み至る

少も櫻うう家事え



端 ちゆう
 元 えん
 本 ほん
 一 いち
 度 ど
 凶 きゆう
 事 じ

起おこりての後悔とつとつなきをこれえき

未^こ然^{ぜん}平^{へい}防^{ぼう}ぎ^ぎ堅^{けん}く^く世^せ用^{よう}

来る事

一聖賢の教をせうぞえふちふかふ

女乃嗜也悦也

かみ文かみよ玉たまの湯ゆぐぐ處女むすめを

戒る事^{しる}を^し不^ふ義^ぎ密^{みつ}通^{つう}る

いふより身を保て親類を

恥てふ家為一生零落し

人生の如く生れ

いぬにせよかれ秀る

大貳三位

うるう人のまゝをいふやうに
 右邊の依前宗室存
 のまゝに母ハ武成親
 あり太宰大武成親の
 妻とあり後一條院の
 乳母とありたる
 二位と叙せられ
 る故人と文書とに
 母とありたる
 武部保氏為緒成

此の書は、
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、
 此の書は、
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

事あるて果て人世のまゝに
 しかつゝの世教あるを
 家まゝふくむより始るべき
 あり男女の差別大切と
 人坊幼少を養ふ男に
 をくつゝに



此の書は、
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、
 此の書は、
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

一人の妻を納りて乃不義
 密通の生れ父母對して
 教を合はれし親
 殺しは重罪人能く
 生れその為のあり
 白刃を挽て殺すはつゝに

母のつれなきあはれ
し 我名もなき世
あはれなき世の娘
このひつがし
堀河院宮女中務
大寺持士某の女
二親ははる孝あり
又あはれなき
まゝ和家のなり
名ありあはれなき
女中某合のほ合
あつたはるなき
まゝ
なまのなき
まゝ
まゝ

あはれなき世の娘
面目を失ひ存命く永く
愧れぬれんや世をま
終りたるまの海
其女に付斬るまの海
かひてまの海に任やぬ

はるのつれなきあはれ
し 我名もなき世
あはれなき世の娘
このひつがし
堀河院宮女中務
大寺持士某の女
二親ははる孝あり
又あはれなき
まゝ和家のなり
名ありあはれなき
女中某合のほ合
あつたはるなき
まゝ
なまのなき
まゝ
まゝ

事もありまの恩を仇とて
報ふ不敏者世のつれなき
めも即重に付ぬるまの海
せえくせ恥少し
他適く妻あるハ假
初めりあはれなき世の娘

けしきとて中洗
 子帝はいふは
 新ひすえいそだ
 家とて母とて
 らはそとて焼て
 せりりるいやぐ



神もあまのあ
 なるもいびくたう
 なるもあまのあ
 しくいふのわが
 ぶけ新うとてい
 これいふうなま
 感ある事ある

石見娘女
 女はあまのあ
 なるもいびくたう
 なるもあまのあ
 しくいふのわが
 ぶけ新うとてい
 これいふうなま
 感ある事ある

女目

生涯人はつれもの
 けりともく掃膚の刻
 てを坊ぐ一席重人の教
 女と生ても二日床下
 間と暮しむれ生人
 随ふ方お低く居て
 随ふ方お低く居て

初め教る意あり所生
 育て昇り瓦を掃を織
 縫把針と女第一の女
 せ涯の業あれはり瓦
 糸車乃具とて先尖る
 ものも瓦とて掃を織

女目

十六

候ては御座り候へども
分は申さばはか
聲いとぬく
あやうはあかり
けれは國の御座り
候ては御座り候へども
しを御座り候へども
あやうはあかり
和歌と御座り候へども
の御座り候へども
あやうはあかり
候ては御座り候へども
國の御座り候へども
あやうはあかり

小焼うけ道田忍瓦の家で
つむと割れ記におう
ね嫁うけまて夫おひ
その身は地のおひ
男おと生れ父母と思ひ
か候て孝養に小男

けるあうて候へども
あやうはあかり
候ては御座り候へども
あやうはあかり
候ては御座り候へども
あやうはあかり
候ては御座り候へども
あやうはあかり
候ては御座り候へども
あやうはあかり
候ては御座り候へども
あやうはあかり

小姑の親こそおれ親
を親の附合まぐ和ご
睦びまら外事とつとあ
妻も肉を食るのれ
男女の家来よまらるる
是照態乃誠意及

孤婦武子

町に於の片をふく
何氏といふをふく

お母さまとうふと父母
 おはつかりそめにも
 その言葉のせむら
 べ十に父家うしう
 父母よりこれ家次男
 お母さんくわうん
 けさびりうき嫁く
 とにまぶざうてあ
 うき父母をあげき
 若くひなる七月
 いう亡魂をうき
 をするに抱き
 思わや懐ひとあり
 これを伝ふにあら
 連の業く晋の家
 とうれてなりよける

家事に五端よめられ
 惣て圓面その基より
 方々親兄弟も人を安ん
 是も孝乃の一端あれ
 の事から

一近鄰の附合を切し公議

利^りの^ぶー^る多^{おほ}云^ん利^りは^るる
 婦^ふ人^{にん}乃^も大^{おほ}所^{ところ}あり詩^し經^{きやう}
 婦^ふの^{ちやう}長^{ぢやう}古^こありと嫌^{きら}ふと
 同^{どう}書^{しよ}は北^{ひつ}雞^{けい}の晨^{あさ}に就^つち
 家^けの聲^{こゑ}ありとありと智^ち
 豈^{いかで}明^{めい}の生^{せい}歟^やとくも夫^そを

露

三ノノ

三世の佛も

これぞ美人の泪也

もろきけりまじり

母の年忌ふりて

今日偽を信ず偽

夢りて空の家のれ

ふたふた見て無

うきとせがひ

あられはあまの
ひるんで

乃此燈をみく

急死する人

人

ん
う
う

で

三

多

想

と

...

○

5

—

おもひなりけりまこと父
 母の年忌ふりてり
 なる日偽を焼ず偽
 夢りてそふぬのれ
 ふるさふとて我
 わびひともむきや
 うあふざればひき
 なられよあひねぞ
 ろれ師をもみく
 煮たて立上るゆえん

とまへるに狐子この夢ゆめの
うわさうわさの佛ほとけとまへる
る所のあやふさとして
可たの手札てなと布ふ施せと
しつゝしつせり傷きずれ
と儀うけて手札てなの中なと
るに手札てなに批ひと
ひて音おとの款うけを入いれり

玉之步

かき

夢と云ふは

あなまろ

竹江為志

此偈多くあるを
由のせうに感

いづれく後ある
富家こそいひさう
たりまえるにその
人もゆくわかれよ
是く孤女を養ひ
ふかすれぐの物



を祇くかかへ
ぐさるるけ
これも孝女とわ
れ孝婦よこそあり
れ

袈裟御前

後白河の院より
城南を羽の里に
衣川といふ所まで
多一人の女ありうが
名の衣川よりうそ
お家と号す母を
仕ふいと内めをに
孝をけくもつて
二人の甥あり一人は
源の友と云ふと云

出づ夫れ恥うもあり田方
一族まで恥辱を多(めん)面目を失
ふむよく忘れはんと嘆む
後深のう祖れ皇后成
呂后とや高祖をれわに
のちへ天下れ政務を掌る

ひ不ぞの發明乃女性
おれども生質嫉妬ふく
う祖の妾を戚主とふひ
しづ二代め惠帝れ母あり
呂后の妹を呂須といふ樊
吟の妻あり此婦も妬強

今一人を遠く武蔵
盛遠といふ如きもの
五月かゝつてせむ
盛遠つゝとつとんと
を那ふといふと云ふ
いつとひえあるさ
後二後三と云う
やそれと云ふ盛遠
太は怒り一日に云の
所へ来り有るを
いふに刀を云ふに
むひよにいててひ
けきと云ふと云ふ
かとい伯母の命を
なすつていふと云
いふと云ふ切と云

うりなぐがけさ
 お目そふあめだそ
 参るまゐ並より十どろ
 先きやなりぬふまじ
 日と存ぞんざいふ細あり
 ひとをやりくは押止おしどまり
 こゝろふまひきて
 初そにやたるいた
 程よ思おもひ違ふうの
 世ひまーさうろづ
 今日づから夫あり
 今宵こんやひそに聞きこえ
 あめび入る夫を殺ころ
 更を後あらやま
 かてひ信ちべー
 必死仕掛りやわな

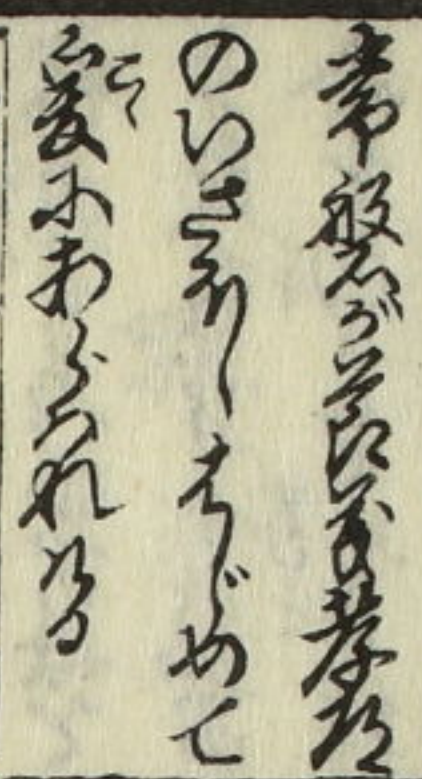
賢人精女の老翁四人を
尋ひ出し、ある事れ左右に
亦て名高山に記されし
あそびを位で易うし
前代二代め乃天子と
あそびのふよりかくは

の凶事こゝろ乃及およぶと和漢わん乃
 なめ古代こゝろゆありしと形かたちり
 聖賢せいけん者と室むろひるむむお
 らばや嫉妬あつとのこゝろ述ふる如ごとく
 婦女ふぢうの愧ちがづき事ことあれども愛あいふ
 又また一事いちじありせり一妻ひとつま一妾ひとめかけ

常磐御前
さすのうきまのりあふしや
左馬政源義經の
妻うて今義経
牛若太の母と
義経亡びのち

法盛色しやうしきに對たいてこれ
 と云いはれむと云いふ
 とも盛も自みづから成なりて
 ちりて死しるべしと
 伏見里ふしにわくは法
 盛しやうしきとて其その母ははと
 となつて害がいをなす母ははの
 命いのちを助たすぐと止とどむ紙
 には流ながりぬるをひ
 母ははの命いのちを救すくひ三人さんにんの
 命いのちを助たすぐと義孝ぎこう
 の友ともと金かねを賣うて表うへ
 又また自みづから女をを捨すてふと
 標しるしとやづるは後ご文ぶん
 の子こ成なりて平家へいけ
 の二門にもんと云いふは二門にもん

妻と有りせうに失礼のそ儀
 ねとまこれと制されども自
 下は別かく家事を乱
 の始なり夫の扱ふ所は
 風流するに當りあるべ
 嫉妬の念を離れ実を



東海乃池田宿の在
者と云え一若の娘
ありと云ふなり孝
ふと云く容るるく

是てやうに秋の乃々
 逢へ平肉大屋を盛
 ふはうて秘蔵をわさ
 ねふあうるが故つ
 母ありの病ふ即て
 是考危きやうヤ
 来りなるふだいま
 暇であつて人をそ
 ひられども宋夢あ
 した湯谷の母のる
 のと思ひく憂はな
 あり宋盛こそを
 観んと来ふは元と
 伴へ酒をきめて首
 の款をそそけるに
 とうあへん

義あり妻ある老夫の妾ら
あまの下の女より顧を厚
くせむを用て供ふ海へあれ
心持中妻のまことひきし我
主人なればる敵の名を忘れ
かばははづもる妻妾の

つとせ
おのまゝ
うれせ
おのまゝ
うれせ



とけとれが宗盛
おのまゝ
うれせ
おのまゝ
うれせ

たなまに娘姑のあつるより
雙方の遠く夫の志を
自負くあゝ妻を侮り妻を
妾とあゝ互に月を劍を研
の志のりあつる重んず恥を
知く美端堪忍の心ありと

源義経安静

静の義経師が
母の丹後の様といふ
里のふさふさな女
おのまゝ
うれせ
おのまゝ
うれせ

附合ふく一筆するれども
下く恥なくあつる
制するは間ぬきでうけ
夫の恥銘も愧を表い
とる玉に股の芽はま乃公
妻のふとあるべし

一人の私書と伺ふと云はれ法
 母いふと知り誰かといふ文を
 書きたる傍より現みると
 不れと云ふ
 一不義密通の艶書の取
 次をあると云ふ事公より

おのれ沖は重なるに例あり
 忘れぬきこわく女うぐ
 美ねびふあつとともん好交
 きてうけふつとつねとく
 ぬ事い手傳きとを荷擔又も
 腰押ともいひて嚴き法度

大なるの世にあらはれ
 う今根を断るこ
 りんと別居はふ
 断てふしむるの
 あつと事ゆゑ
 三度すむて
 りに母ある様
 今何とてけ
 る我の海
 るわじと保め
 りれ母の言葉
 いふ人
 断るの神
 今根を断る
 りやうの曲
 断ひ



断るを断る
 う乃の
 断る
 入る
 断る
 断る

あり何の悪事にも
 怖るゝおれもか
 心安く悪事を為
 其河原中人より
 治をたれ河原
 一女の家
 父の家の家
 母の家
 送る如く
 只を何の再帰

おとする老
 嫁といふ又
 己が
 父母の家
 送る如く
 只を何の再帰

樹やあり

しづかき

うら

わい

今も

うら

とちやと唱へて曲の
中にも幾多の事と
おもふを偏るそ
ののいひて歌ひさ
められ陽気な女
に感下さそこれ
あはれに堪うなり
二月後余よりて
そと九月のうら
いふなりわい

て後世に出るを
妻とて自害あり
と安られ母と
もふにとうて候
飛尾のわとうこ
にるがやありて
おはるは母と
うけるなりわい
とてふのこれ
秋きて遠はわい
て命けり
二十七年うら
は白柏とわい
まは孝貞の
うらわの
様とわい

女三目

十七

えうされば嫁しゆくま乃

家へ生涯家う

出てゆる乃昔の人と離別

せられ父母の家へ送らる

あはれ内へ自滅せしめど

わう一旦嫁しその家へ死せ

生る里方へゆる乃あけま

なり能道を辨しめは

かき乃

一姫とありふ家家と

力上ありたる方より送

常は性としてよく婦道を

女三目

十七

幸田満行の女

海防の信濃國の人
あはれと志を固く
以て後金の後
足利成氏に捕はれ
ありぬ娘は
乳母と志を合
白相する妻と
さくといふ
つてとわく
彼牢を
ちがき
まひ
あぐさめ
び



伏るは牢に
ぬきぬき
と父と
あぐさめ
み
佐々木嚴流女

坐る娘を嫁付は家より
増りたる家より是も同
ト理あり
己と親と子と三親と
親の兄弟己が兄弟は
ふの二股は出る族と三族に

己より上は父祖は曾祖父
子祖は下は子孫曾孫
孫は上は四股下は股己は
九股ありこれより出る族
と九族といふを親類
と遠き親類と



殺報の端を免る
 んやと云くころを
 改て父を殺す
 は善徳を賜ふ
 なるべしと云く
 歌に遠く我志の

おまづていさる
 知く善徳を賜ふ
 ん善徳のなるべし
 と云く

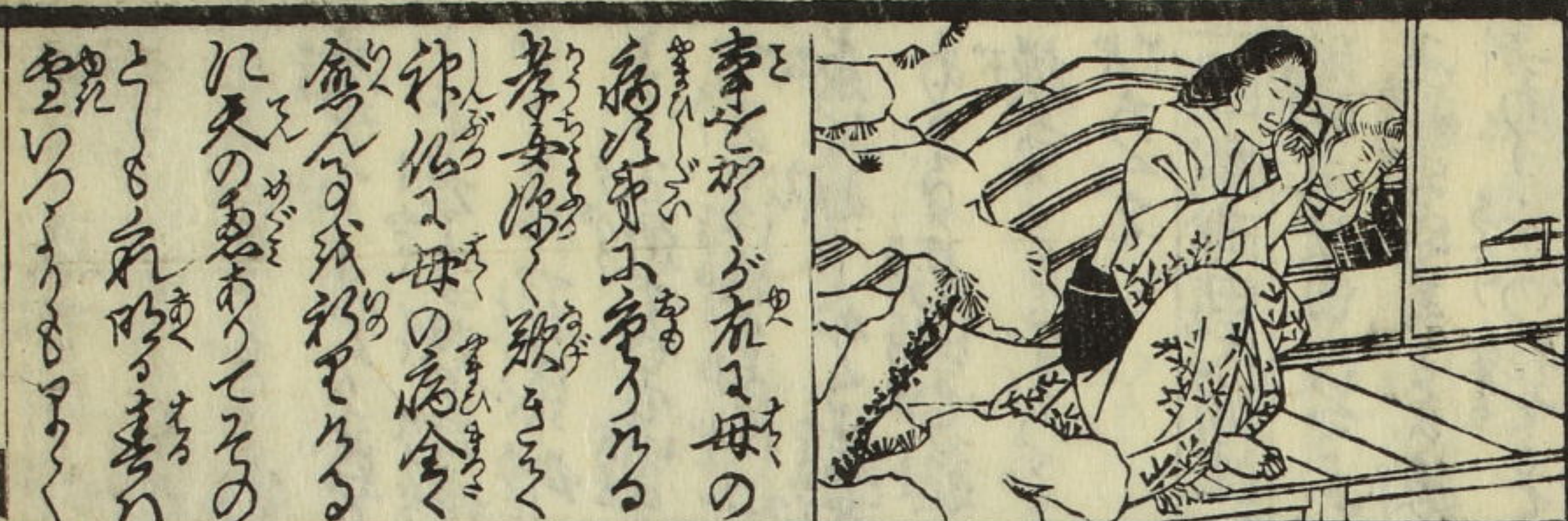
竹氏 孝女

越後浦原郡桑村
 の農父竹氏の女
 幼くして父を失ひ
 母ははたき老なり
 は年十七八歳の
 秋より冬にわたり
 母の病おかし
 て大に悩めりこれ
 小國のあひま
 雪を埋りて

身と父とをわたりてをいふ
 又親をわたりて血脈を
 縁者たる嫁を嫁付婿を
 此の子同前あつて血脈
 う婿の妻のあつて男始
 きて父母の如くされども

肉縁あれど縁者なり
 農高乃先別かぬ事
 里方に死妻ありても親
 の忌中といふ親ひま
 けり婦女より出ても親
 類縁者三族九族の伏

父母がきて先居る
 いふ一聖賢乃教
 忠臣二君の事
 主の事
 主と教
 主と教
 主と教



再嫁さいかの法ほうあり乱世らんせいなど
 何なんも禄ろくを増まて士族しぞく募もり他ひと
 千石賜せんごく ちいふといふが我われも
 二子石ふせんごくをふへ浪人ろうりんを招まねぐ
 主人あやうじんかくわれを匿かくひ後文あやうじん
 福代ふくしろね侍さうべんの主人あやうじんを暇ひまを

解く孝女が形状
を説くありこれ
まふべきものなり
義とていふなり
孝女を母とて
せある村氏ハ
よりを仰ぐなり
をまては形主の仁
ある感から孝女
あるは是れ其の
模ありてそつて
びあり

因幡岡田氏姉妹

因幡岡田氏と云ふ
小田氏系と云ふ
まの二人の姉をも

戸籍上は父の
孝女と云ふなり
まふべきものなり
義とていふなり
孝女を母とて
せある村氏ハ
よりを仰ぐなり
をまては形主の仁
ある感から孝女
あるは是れ其の
模ありてそつて
びあり

清て祿の多き方ありは
族が来る是ハ乱る世に
事あるてもありねん
婦女子一夫死されを
親類を後と寡をある
しも年若まれハ親里を

度と再嫁の熟後整ふ
言せれ方ハ先ハか
おれども後きものハ通例の
なり坐ある然るに
賢者ハ母の一人あり
名貞操と云ふても善き

なる子も好くばいん賢者の
 いそ寒餓の死を必う死
 こと同をあせども寒餓の
 倒き死すの一旦うと易
 節を失ふこと死
 永年それ名を強し

以つされば^{つら}おくくく^{わちめと}と審あり
 一戎父母再嫁せ^{さい}りめん^うと
 志^{あきらめ}られ^{あきら}む^め自^{みづか}耳^み鼻^{はな}を^を彫^う割^{きり}
 衾^{あきぬ}を^を被^{おご}て^ふ卧^ふく^{れつ}た^ぶ烈^{れつ}婦^ぶの
 事^{こと}小^{せう}學^{がく}へ^くん^くえ^える^る枕^{まくら}を^をぶ^ぶ
 命^{いのち}を^を留^{とど}め^める^るも^も再^{さい}嫁^{えん}と^んする

るゝを定法ありむ
西國方藩中の武家同輩
の娘と妻とに此家下女乃
其年の春より抱へて
妻とに農人の娘あり妻を
迎へて當分の膳へてんえ

けつぐ主無切は妾を愛して
奴婢一同は妾を重んず妻の
如くは終つて迎へて中実の
元來武士乃娘ゆゑの
第乃も母柔順の生實は
く亦も仍儀作法も禮

お懐うちひ父ちちを劔術けんじゆの師しと見みえ
 しそはは迎むかへて静流しやうりゆう乃な
 羅刀らたうを洗せんひひ武士ぶしの妻つまと見みえ
 恥ちうかぬ人柄ひとがらあれども
 そふ不孝ふかうとてい家このけ（嫁か）
 来るきる天てん命めいの時ときをいふと見みえ



位牌をさぐりて
を吊ひてくはれ
入るゝとぞ
るゝを命を捨てて
今生に因て
世の果てまで
あはれむる感
ありあり

此女よく重戒諦あつて
 只慮しけるは我史を教
 家へ心よく悦された難おせん
 辞も好く口れより力せひ
 身勝を請ふを候ふあるん
 去なぐら一旦此乃家に来る

上うへの生なまて里さと方かたへ有ある謂いふ
 我われはよりての父母ちちうはも我われと云いふ
 中なかに我自われ害がいせん父母ちちうはの歎なげ
 を拭ぬぐふ不孝ふこうといひ何なんの由よし
 名なも知しれず父ちちを殺ころすは母ははも
 形かたちの家の男おとこ姑いそを殺ころすは

密にや候なる方もなり
 五つ庄の石ひし沈し
 内主腎一癖出来候
 西を装藝して打掛
 你更に強盗三人被
 押入家来の奴婢の作

万葉集 秘傳

○小油の垢をあらふ
あつた小豆を粉く
水をもみそへ
水をうすゆへ
る事なげうへ
ぬいて底よく
とろろへて干
熱湯の中へ
粉と葉一ふく程入
るあつたへ
よく煮るふく程
んを例へて何
れをもあらふ
解

○縫物の糸いひ
ても水ふく事
かゝりの油のか
やたるを落し
滑石の粉をその油
の上へまきうけ
おろし紙をぬき
火のうすへて
なでればあらうなり
但しあらうなり
又方
あつた垢をこそ
とりてまのこ
すればあらうなり
又方
あつた垢をこそ
とりてまのこ

女式目

回藩の士有死人はあられた
是より事露頭へ領主の
吟味して明細なれぬとも
事の起りかゝる妻女親元
在り月同僚の若者必し
かゝ人多しと云ふ父母乃

女正と云ふ家の名はあつた
と云ふ娘も願はず親元を
共り合はれ縁を案縁内
先と云ふ妻と云ふと云ふ
と云ふ親と云ふ合はれ
妻と云ふ嫌ひ親元へ
妻と云ふ嫌ひ親元へ

女式目

三十九

おのづからいふは
いづれも大のいふ
ぬくすぐはて
もをけり
○衣服は血のつ
たるで
折る血のつる
その水の上
あまの
上へ木桶の
灰で
らず
又方
あまの
あまの
あまの

○衣服は血のつ
たるで
折る血のつる
その水の上
あまの
上へ木桶の
灰で
らず
又方
あまの
あまの
あまの

密に申通するとならりと
夫れ月通ずる離縁せむ
親元へ再縁を勧めん人
此様様りしは
そそく間なる有るは
あつたを孝ひむび入る

盗賊の作られども
ももれ妻を牽き去るも
わづかに愛相つきて早
黒い人残起る人
謀計ありて夫れは妻
女男に接する者若くは

四

○又方米のあつひ
けといふ下ゆき
でうき目より
わうと湯をつき
うき目より
うき目より
○又方米のあつひ
けといふ下ゆき
でうき目より
わうと湯をつき
うき目より
うき目より

なるるあり
○洗の付くを
すまの煙を
うき目より
又方麻のあつひ
わうと湯をつき
○又方米のあつひ
けといふ下ゆき
でうき目より
わうと湯をつき
うき目より
うき目より

わうと湯をつき
うき目より
うき目より
わうと湯をつき
うき目より
うき目より
わうと湯をつき
うき目より
うき目より
わうと湯をつき
うき目より
うき目より

わうと湯をつき
うき目より
うき目より
わうと湯をつき
うき目より
うき目より
わうと湯をつき
うき目より
うき目より
わうと湯をつき
うき目より
うき目より

女けやうの巻

いふやうなぐちであつて
あれどもよくてゐる
^おもれられ女中の
別々としてゐた
まゐらうとあつた
しく稱へられ
をうけてゐる
とねづねづね
一袋の油あぶらはさみの
油をつけぬといふ
あつた
ひかうづねづね
ほかのおもてに
ひかうづねづね
ひかうづねづね
ひかうづねづね

食玉は換ぐもゐる家の至

藝術の立場より見て父母の

線せんその外わ音曲おんきょくの身み分ぶんにも

よる
とら
とらふ
あらうま
あづ
和歌の
戦國
文藝の

教心熱くは古今集乃
序に如く
後すとも今世俗の所言
海に如く
覺えたること
文盲おするも同く真実の

うひまゐるびおとをよく
ふね
ふねぐーわおの作法方案
家二条家ふは任や好む処
院ふ庭へ常は随順を導
きて我々の挙動を懲り
て男女とも平日を

正しく成長して雙親へ
 辛勞をかゝる世よ
 あらゆるものあるが
 心づいて懐く
 農家の子へ耕作の
 身づくろいを
 せよ

と厭いとひ高あれたまひれ乃なほもて
出いすものありあは民えんよえ
士しに終はつる分ぶんをそはるそのを
應おうぐある儀ぎをきこひ
或あるは基こを素すも想かりて
遊あそ民みんの生まれねをまへにあるをと

固^この事^{こと}能^{あた}くふれ始^{はじ}まり
 是^{これ}より勝負^{しやうふ}賭^か事^{ごと}に^うめを
 敗^{やぶ}る族^{やう}多^{おほ}し親^{おや}の仕^か付^{つけ}より
 かぬ^{かぬ}存^あり女子^{おんな}の害^{やう}に^{さん}害^{さん}蟻^あ
 の業^{わざ}系^{けい}探^{たん}織^し機^きに^ある
 母^{はは}乃^な教^しえよ^うる^やと^うこ^うなり

商家は子おのくそのあま
 体のだいひなまゝあり夜
 分算敷の松名古懶怠く
 女子よりとも八算え一の除
 東ぐらゐの光也ア小唄
 淨瑠璃簪古の事いそそ

分ぶんももろろ或あるも奉ほうるん
 無む藝げ若わりあり付つき来き疑ぎさ
 也や志し者しや曲きよくを学まなぶする所ところど
 随ずい之いあれども男おんな子こに
 使けうる世む用ようるは農のう事じの
 事ことに遊あそび若わりあり家いえを破やぶる

乃春まそ金く親の仕付
 仍届めあり律義放蕩
 等く病くの生無異と也ども
 親の懐心くが常より友と
 なる人乃善惡次中右指
 小水ら方圓此苦牙既ひ

夜通姫小孫小町を
 ちねとむうの
 名をたふさみ
 お白粉でけし
 あふりたも秋
 ちもふくういんや
 つひの女をある程
 ありあつる白粉を
 うすくとしき
 よめがひえあふ
 べし白とぬりて
 耳のあつる鼻の
 ききむうこの
 ちもふくういんや
 めのあつる白粉
 うすくにしき



人々善悪の友なるを
 格言所多しなり
 人乃親も姑もどん
 何る處に
 祖父祖母へ孫をか
 こき甚く却る儀乃

た老あめも何れ世の
 後祖母育まとい是也
 老人も世所も人皆
 あり四民も幼少の子
 何れより起居の儀を
 教へ人來る男女も



趣向の戯場より九組狂言
 けしき候はて所益を得ず
 実事を恥て假名小野道成
 吾番通の公家成るこ云
 いまの世小兒をあり信と
 らば海は毒を流るもいふ

あつちろぶ不孝の
 男の女をとりとむる
 のあつちろぶ不孝の
 男の女をとりとむる
 のあつちろぶ不孝の
 男の女をとりとむる

趣向の戯場より九組狂言
 けしき候はて所益を得ず
 実事を恥て假名小野道成
 吾番通の公家成るこ云
 いまの世小兒をあり信と
 らば海は毒を流るもいふ

あるべし州雙帛をうりて
 也悉く用ひ害あるを
 形りて来て他意小児の
 美しあはれとて男女大人
 見るをあり疎費しとて何
 ひとの善を好む事とるかと

元々なるも悪者といふべし
 支那も人畜に似るを以て
 元々の時施耐庵忠義
 水滸傳の百回本を以て
 門の金聖歎の稗史を以て
 雄使者の事なりとせむ

五

功名事在懸心

日本天皇陛下

和ぬきせの腐儒の風あり佛
 道を上下を貫くを教にたひ
 ちれ國の人でも盡に世も
 滅しまたた儀も名も義
 の福なりふは我も神武
 天皇の神なりて我を中と

忠を第一、孝と順、
 之を病のけがれを返す
 潔白に勇氣を盡し、
 文武を用ひ、
 女武目終

嘉永五年壬子春二月上梓

江戸

發行

書林

日本橋南町丁目	須永屋茂玄清
日 南町丁目	須永屋新玄清
浅草茅町式丁目	須永屋伊八
日本橋南町式丁目	山城屋佐玄清
芝罘明前町	墨田屋嘉七
本石町十軒店	英屋大助
横山町三丁目	和泉屋金次郎
馬喰町式丁目	山口屋茂玄清
通 油 町	友屋茂次郎
浅草福井町表町	山崎屋清七

久半入

